

INTERFACULTY INITIATIVE IN INFORMATION STUDIES

GRADUATE SCHOOL OF THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京大学大学院情報学環 学際情報学府

学環学府

number. **Five**

INTERVIEW

法人化、組織統合が同時に訪れ、自身の研究への時間は全く取れない忙しい日々が続くなか、新しく学環長になって思うことを花田教授に聞いた。

学環長になって・・・ 花田達朗教授 インタビュー



4月、情報学環・学際情報学府は、社会情報研究所と組織統合しましたが、そのことについて考えることは？

東京大学の中に、学際的に「情報学」というものを教育し研究する一つのまとまりのあるユニットが必要だというのは、時代の必然だと思うんですね。それは単に教員、研究者たちの知的関心からだけではなくて、今、大学が社会の中でおかれている立場や社会からの期待を考えると、時代の要請なんですね。そして、その時代の要請に応えていくことは、今日の、大学のアカウンタビリティだと思っています。それから学生のニーズもある。我々大学人としては、目の前の学生を相手にしているわけで、その学生たちが今何を求めているのか、それを見極めて、大学側がそのための教育プログラムを提供すること、これこそ大学がしなければならないことなんです。もちろん社会や産業界の要請やニーズを自覚し、それを実現していく大きな課題が確かにあるんですけど、同時に、おそらくそれ以上に目の前の学生たちの欲求は大切なんですね。つまり、教員、研究者から見ての必要性、広い意味での社会が「情報学」という一つのユニットを要請しているということ、そして学生からのニーズ。この3点からみて、今、この時代状況の中で、情報学環というものが、組織統合によって強化されていくことは、後戻りのできない「必然」だと思っています。

学際情報学府に新たに3つのコースを設けたことは？

社会情報学、文化・人間情報学、学際理工情報学、この3コースを設けたことで、各コースのミッションがはっきりしたこと、カリキュラムはそのミッションを実現していくために編成さ

れているわけですから、ミッションと実際のカリキュラムの構成、構造が明確になったことが、一つ前進していると思います。ただ同時に、学際情報学府というのは、越境タイプの新しい大学院なので、その越境文化も同時に、維持して成長させていきたい。だからある種、車の両輪のような考え方が必要で、二方面作戦っていうのかな、一方では「情報学」という傘のもとで、学越境を実現していく、しかし他方では、越境していくには自分の足場っていうものも築いていかないと、本来、越境そのものがない。だから越境しながら、自分の足場も築くという、ある意味で非常に難しい課題が学生諸君にはあるんです。

この3コース制は、学生の教育のためには、このように編成したほうが、教育効果があがるだろうということでもあるんですね。高い水準の学生を社会に送り出さないと、学環・学府の評価が落ちるんですから。設立してまだ4年しかたっていないわけで、長期的、中期的にみて、学府で教育を受けた卒業生たちが、社会からどういう評価を受けるのか、これからが正念場だと思っているんですね。

この卒業生が社会においてどのような存在であったらと思いますか？

簡単に言えば、「新しい知のイノベーター」になって欲しいですね。従来の枠組みを自明のこととせず、それを疑い、新しいものを生み出していく、そういう人材になってもらいたい。それを、アカデミーで獲得した知識や方法という背景のもとにやってもらいたい...

情報学環のこれからは？

情報学環・学際情報学府は、「研究科以外の大学院」という定義があるように、新しい組織論でつくられている大学院組織です。古い足かせがないし、その分、機動性をもって、自由にダイナミックに、教育であれ、研究であれ、社会貢献であれ展開していくことができる、有利な立地条件にあると思うんですね。それを今後、どう生かして、教職員が動かしていくのか？ということですが....

俗っぽくいえば「あそこに行ったら面白いじゃないか」と世の中で、あるいは学内的にも思ってもらえるような組織にならないと、発展しないと思っています。学環・学府っていうのは、みなさんのご協力のもとに成り立っているわけで、そのご協力をどうしたら得られるのかっていうと、学生にしろ、教員にしろ、「あそこに行ってみよう」と、外から見えるような組織にしないとね。そして、新しいだけに、学生も、自分たちも一緒に学際情報学府という場を作り上げていくんだという意識を持って場だし、そうあって欲しいですね。

TOPICS

この4月、情報学環・学際情報学府と社会情報学研究所の統合に伴い、教育上の学問的基盤を確固たるものにし、学際的研究の環を広げるため、学際情報学府に3つのコースができた。各コース長にコースの特徴を説明してもらった。

学際情報学府に3つの柱

文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、ある意味で学府の3コースの中でも最も学府らしく、文理の融合と新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいます。教員には、基礎情報学、進化学、生態心理学、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、教育システムなどの領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導に当たっています。学生の皆さんは、理論や調査に関心のある人々と表現や制作に関心のある人々が協働しながら方法論の修得や論文執筆に向けて切磋琢磨しています。このコースの教育は、生命・身体・環境、文化・表象・映像、メディア表現・学習・リテラシー、アーカイブ・歴史情報という、より理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしています。文化・人間情報学コースは、これらの4本の太い幹の周囲に多様で野心的な枝葉を伸ばしながら、情報学という新しい学問の森で、文化・人間科学の諸領野を体系的に再編し、それぞれ生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組もうとしています。そして、そのための深い学識と精緻な方法的能力を備えた研究者や実践者を養成し、未来の世界に送り出そうとしているのです。

(吉見俊哉 教授)

社会情報学コース

社会情報学コースは、一言で言えば、社会情報にまつわるさまざまな分野の学問を学際的に学び、研究と実践を行う場です。そこでまなぶ「社会情報学」とは、メディアやコミュニケーションにかかわる社会現象・文化現象、情報社会における諸問題を、「社会情報」という視点から学際的に分析する新しい学問です。コースはさらに、「メディアとジャーナリズム」「法・政策」「経済・産業」「社会・歴史」「社会心理・情報行動」「アジア・地域」の6つの領域からなります。そこでは情報法、デジタル経済、情報社会心理学、メディア思想、メディア社会学、アジア情報社会論など、既存の人文・社会系学問に基礎を置きつつ、最新のデータと学際的知見を駆使した研究が行われ、その成果の一部が授業で紹介されます。より具体的には、電子マネー、情報公開、「2ちゃんねる」のもつ意味、携帯電話普及の影響などが実際に授業や演習のテーマになっています。

学部レベルで社会情報学を専門的に教えている大学はほとんどありません。ですから新入生の方は、社会情報学について勉強が足りないことを恥じる必要はありません。コースでは、社会情報学の基礎や研究法が初歩から学べる授業を用意しています。大学院生の皆さんは、まず社会情報学の概要を知り、各自の関心にあわせて、広い視野で勉強を進展させていただければと思います。

なお、このコースには「社会人特別選抜枠」があるのが一つの特徴で、社会人経験をもつ人が、社会情報学の知識・理論や研究態度を身に付けながら、より高度な職業的、社会的実践能力を備えた専門的職業人となるようお手伝いします。

(橋元良明 教授)

学際理数情報学コース

学際理数情報学コースは、その名の通り「学際性を意識して理数系の情報学を学ぶコース」です。このコースの教育は、コンピューティング・言語、メディア・行動体情報技術、情報造形・コンテンツの3分野を主な柱としておこないます。

ここに、「コンピューティング・言語」分野には、アルゴリズム、プログラミング言語、コンピュータアーキテクチャ、オペレーティングシステム、ネットワークなどのコンピュータサイエンスの基礎、さらには自然言語処理などが含まれます。「メディア・行動体情報技術」は、画像や音声などの信号処理技術、コンピュータビジョンやバーチャルリアリティなどのメディア技術、ロボットなどの行動体に関連する情報技術、メカトロニクス技術などを対象とします。そして、「情報造形・コンテンツ」分野では、コンピュータグラフィックスなどの情報技術に基づいたメディアアート表現やコンテンツ制作に関連する話題を学びます。

このコースでは、修士一年の夏学期を中心に、上記理数系の情報学の基礎科目が選択必修科目として用意されています。これによってまずは研究者として武装し、さらには選択科目等を通じて文理にまたがる幅広い知識を身につけることにより、「学際的に協調できる理数系の情報学の専門家」として皆さんが育っていくことを期待しています。

(原島博 教授)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府
新生記念シンポジウム

「智慧の環・学びの府」
せめぎあい、編みあがる情報知

大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の融合を受けて発足した、新・情報学環・学際情報学府の活動と展望を紹介するため、シンポジウムを開催する。今年度より、学問的基盤を確かなものにするために設けられた3コースの説明、パネル討論をする予定。

日時 6月12日(土)午後1時30分～5時
場所 東京大学安田講堂

お声をおかけ合わせの上、是非お越しください。

PROJECT

東京大学大学院情報学環助教授 山内祐平

寄付講座：ベネッセ先端教育技術講座開設

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府では、iii online, Asia E-learning Networkなど、情報技術を用いた学習環境に関する研究・実践を数多く行ってきたが、平成16年4月1日より、携帯電話・モバイル端末などの学習利用に関する研究を展開する基盤として、ベネッセ先端教育技術学講座 (Benesse department of Educational Advanced Technology = BEAT) を開設した。この講座は、(株)ベネッセコーポレーションより寄付を受けたものであり、東京大学では初めての教育を中心テーマとした寄付講座になる。

この講座の開設にともない、4月1日に客員助教授として宇治橋祐之氏が着任した。宇治橋氏は、NHK学校放送番組部で教育放送を担当するとともに、教育放送と連動するウェブ環境に関する開発研究を数多く進めており、マルチメディア教材などについても造詣が深い。この講座では、特に進行しつつあるデジタル放送とモバイルメディアの教育利用についての研究を進める予定である。

第3世代携帯電話の急速な普及により、すべての個人がブロードバンド端末によってつながれる日は遠い先のことではないだろう。しかし、このような新しい「ケータイメディア」に対する社会文化的なレイヤーのアプリケーションはまだ十分であるとはいえない。特に教育・学習の領域では、ドリル学習などの補助教材の配信や授業での生徒の反応の利用にとどまっておらず、新たな利用形態の創出が強く望まれている。

このような社会的状況をうけ、ベネッセ先端教育技術学講座では3本の研究の柱をたてている。

1) 携帯メディアとデジタル放送

地上波デジタル放送が本格的に開始され、教育番組の姿も大きく変わろうとしている。従来からNHK学校放送番組などで番組とウェブの連動が行われてきたが、地上波デジタル放送では携帯電話に対して映像が配信できたり、付加情報を転送することができることから、従来とは違った新しいコンバージョンのあり方が生まれてくるだろう。また、多チャンネル化にともなって新しいジャンルの教育サービスを展開するチャンスでもある。

2) 携帯メディアとリアル連携教材

携帯メディアの特徴は、人間とメディアがともに動き、いつも一緒にいることである。このような特性を活用し、まさに、「いま、ここで」しか得られない経験を提供するための教材の可能性について研究していきたい。写真1は、山内研究室で過去に開発したウェアラブルディスプレイを用いた歴史教材「Past Viewer」である。これは、一種の歴史めがねであり、安田講堂の前に立って再生すると、過去と現実の建物が重なりながら歴史の流れにそったプロジェクションが行われる。

3) 携帯メディアとマルチメディア教材

1)、2)を携帯メディアの特性を生かした教材開発とするならば、3)は、それらの技術を使って総合的な教材を開発するプロジェクトである。1980年代からアメリカ合衆国を中心に大型のマルチメディア総合教材パッケージが数多く開発されてきた。しかしながら日本ではいまだに国際的に流通するマルチメディア教材パッケージを生み出せていないのが現状である。そこで、科学教育をターゲットとし、携帯メディアの利用をその中に位置づけた総合的な教材パッケージを作成したいと考えている。

今後、このような具体的な研究により、教育利用の中間技術を確立した上で、携帯メーカーなどとのコラボレーションも積極的に進めていきたいと考えている。また、フィンランドなどとの国際的な共同研究体制の確立も射程にいれ、研究交流を積極的に行っていきたい。



東京大学 大学院 情報学環 ベネッセ 先端教育技術学講座



写真1: PastViewer

NEWS



情報学環の看板が掲げられる

4月16日、情報学環の建物に大学院情報学環の看板がかけられた。これは、佐々木毅総長の書を看板にしたもの。当日は、新しい門出に向けて、総長より祝辞をいただいた。

第2回情報学環ワークショップ報告

3月5日に第2回情報学環ワークショップが開かれた。「メディア・リテラシーと情報知の地政学」と題した今回は、翌日からシンポジウムを行った情報学環関連プロジェクト「メルプロジェクト」と協力し、東アジアのメディア・リテラシー教育の第一線で活躍している、呉翠珍副教授（台湾政治大学）、周典芳助理教授（台湾慈濟大学）、李月蓮助理教授（香港バプティスト大学）、ジョン・ヒョンソン上級講師（ソウル国立大学）が登壇、自国のメディア・リテラシー教育を紹介した。情報学環からは山内祐平助教が発表。陳世敏教授（台湾慈濟大学）に総括していただいた。今春から学府生となった人、メルプロジェクト関係者などを含め100名程が集まり、熱気あるものとなった。



ガウン姿登場、学位授与式

3月25日に学位授与式が行われた。修士修了者51名。今年より部局長と、学

生数名分のガウンが用意され、和やかな中にも厳粛な雰囲気を作り出していた。



WWWページ課題研究発表会

平成15年度修士1年のWWWページ課題研究発表会が4月7日に行われ、集まった多くの学生、教員により、発表者を囲む幾つもの輪ができた。これは、3月までにweb上に掲載した自分の研究をこの場に個々が発表、お互いの研究を聞き感想をアンケート用紙に書くというもの。発表会の形式をとったのは、今回がはじめて。“先輩”の研究報告を聞きにきた4月入学の学生からは、「今まで自分の研究活動では接点がないと思っていたことに初めて触れることができよかった、自分の研究のヒントになると、よい経験になったようだ。」



デジタルコンテンツ創造に関する教育プログラム

情報学環、新領域創成科学研究科では、関連する部局と協力して、この秋より東京大学大学院生を対象とした、副教育プログラム「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」を立ち上げる。これは、コンテンツビジネスと先端技術に関して高度な専門知識を有する、国際的なリーダーを養成するもの。一部、相当する学力を有すると認められた学部学生、社会人も受け入れる。

箕康明氏 D1(苗村研)の作品が第2回 DiVA芸術科学会大賞に

箕氏の作品“through the looking glass”が、第2回DiVA芸術科学会大賞を受賞した。この作品は、鏡が持つ対称性や整合性に縛られ



ない映像が、鏡の中と外で自由に展開するもの。例えば、鏡に向かった人が、鏡の中にいる自分の鏡像とホッケーゲームを「対戦」することができる。同作品は、4月上旬、東京都写真美術館で開催された「インフォメーションアートの想像力展」にも出展された。

第11回学環講話会

「異能のひとシリーズ」報告
河口洋一郎教授が担当の学環講話会「異能のひとシリーズ」、2月17日に開催されたこの会は、



「生命のかたちと時間の不思議」をテーマに児玉龍彦特任教授（先端科学技術研究センター）に、生命における美意識と造形の複雑さ、その魅力を話していただいた。学内外の出席者から、今までと違った見方をするヒントになった、刺激を受けた等の声を聞いた。

入学ガイダンス開催される

学際情報学府の入学ガイダンスが4月5日に行われた。社会情報研究所との組織統合、3コースが設けられ、その諸説明、新しく学生生活を向かえるための話があった。修士入学者64名、博士入学者29名。また、4月7日には、教育部の入学ガイダンスが行われた。今年度入学者58名。



メルプロジェクトからお知らせ

メルプロジェクト・シンポジウム
2003終わる

3月6～7日、前日の情報学環ワークショップに引き続き、メルプロジェクト・シンポジウムが開催された。両日を合わせ、関係者を含め参加者は約240名と、

大盛況のうちに終わることができた。今年度は東アジアからメディア・リテラシーの教育実践に取り組む第一線の研究者が集結。また、メディアの流通のあり方を問い直し、オルタナティブなメディア活動をつなげていくための実験的なワークショップ「メディア・バザール」も大成功だった。

公開研究会のお知らせ

「松本サリン事件から10年：何が変わり、何が変わらないのか」（仮題）

日時：6月19日（土）
午後3:00～5:30

場所：東京大学本郷キャンパス

情報学環暫定アネックス2階会議室
松本サリン事件から10年目を迎えた今、マスメディアの報道は何が変わり、何が変わっていないのか。関係者とともに議論する。

問合せ先：水越伸助教
shin@iii.u-tokyo.ac.jp

山内祐平助教
yamauchi@iii.u-tokyo.ac.jp

NTTドコモ・モバイル社会研究所の受託研究はじまる

4月にNTTドコモが設立したモバイル社会研究所の受託研究を、水越伸助教らからはじめることになった。混沌としたモバイル社会の光と影をみきわめ、電話についての歴史的、人類学的調査を踏まえながら、モバイル・メディアのリテラシーを市民のあいだからデザインしていく試みを、メルプロジェクトの活動と重ねつつ進める予定。

問合せ先：水越伸助教
shin@iii.u-tokyo.ac.jp

入試説明会のお知らせ

平成17年度大学院学際情報学府修士過程の入試説明会を、平成16年6月12日に東京大学安田講堂で開催する予定。詳細は、
URL: <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp> を参照してください。

BOOKS



『基礎情報学 - 生命から社会へ』

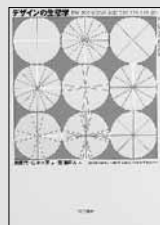
西垣通 著 / NTT出版

学府で学ぶ学生のために書き下ろした本。情報をめぐる知は学際的で文系から理系まで幅広いが、よく見ると共通のベースがある。生命から機械や社会まで、統一モデルで語る新たな情報学を、西垣研究室が提唱する。

『デザインの生態学』

後藤武・佐々木正人・深沢直人 著 / 東京書籍

auの携帯「nisikigoi」、壁掛けCDのプロダクトデザイナー深沢氏と建築家の後藤氏と佐々木教授が重ねた長い討議の記録と、その後考えたことを各自がまとめた書き下ろしの章を含む「デザインの教科書」。アフォーダンス実践篇。



『ソフトウェア工学の基礎』

玉井哲雄 著 / 岩波書店

ソフトウェアは、プログラミング言語による表現という個人作品のような面と、また多くの手で開発される工業製品という面をもっている。これをどのように開発、保守していくのかを、わかりやすい例で解説。

『メディア・プラクティス：媒体を創って世界を変える』

水越伸・吉見俊哉 編 / せりか書房

メディア実践の現場における具体例に学びながら、メディア・リテラシー、メディア表現をめぐる領域の新たな展開と理論を模索。情報の受け手から能動的な送り手への変貌を促す戦略を提示する。学環・学府関係者も多数執筆している。



編集／発行

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 企画室

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

e-mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

URL: <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>